

# 「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

## 第5回

## 「等身大でいい」

### 土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

わたしは教員生活の3分の2を人権教育担当をしてきました。担任時代も学年の人権教育担当をしていたので、教員生活＝人権教育と言っても過言ではありません。「しんどい子」の担任をしたり、交流会をするだけでなく、人権教育推進の裏方ともいえるさまざまな事務仕事もしてきました。おかげさまで、事務処理能力はずいぶんと鍛えられました。いつしかそうした仕事の人から評価されるようになりました。しかし、人から評価されるようになるにつれ、わたしの存在価値は実践や事務仕事であって、「実践や事務仕事抜きの『単なるいつき』には価値がない」と感じはじめました。だからこそ、実践や事務仕事をがんばりました。すると、それが評価されます。その評価は、わたしにとってのプライドであると同時に、「単なるいつき」の無価値さをわたしにつきつけるものでした。

そんなわたしにひとつの転機がありました。

わたしは2010年にSRSを受けましたが、いろいろ不満が出てきて、2015年3月に再手術を決めました。今回は前回とは違うN病院に行くことにしました。他人が手術したあとの修正術のめんどくささは、素人のわたしでもわかりますが、Yさんは快く引き受けてくださいました。そして、7月に再手術を受けました。

手術のあとの休みは2日だけ。そこには「修正術だから、たいしたことはないだろう」という勝手な思い込みがありました。ただ、3日目に職場に行くと、さすがに「『安静』とは寝ることなんだ」ということがわかりました。が、2日もすると身体も慣れてきて、ふだんどおりの生活をはじめました。

手術の2週間後に、トランスジェンダー生徒交流会のキャンプがありました。みんなと一緒に肉を食べビールを飲み、楽しい2日間を過ごしました。帰り道、おみやげを買いに寄ったお店でトイレを借り、便器に座った次の瞬間、プツンという音が聞こえました。あれ？と思って下を見ると、すごい出血です。しかも、タラタラと流れていて、止まる気配がありません。

外に出ると卒業生たちがいて、大騒ぎになりました。

それでもとにかく、京都市に向うことにしました。ところが、出血が止まりません。患部は見えませんが、確実に出血し続けているのがわかります。途中で「これは限界だな」と思って、救急車を呼ぶことにしました。119の電話を終えて、ふと下を見ると、血の池が見えました。その瞬間、気絶したようです。次の記憶は救急車のサイレンでした。「助かった」と思いました。そのまま救急搬送されました。病院の処置室から出ると、卒業生たちがずっと待っていてくれました。みんなとこぶしをあわせながら「生きて帰るよ」と言い、ICUに運ばれました。わたしの入院の知らせを聞いたYさんは、わざわざ名古屋から来てくださり、すぐに再々手術の段取りを組んでくださいました。

救急隊員の話によると、約1リットルの出血だったとのことでした。京都市内までがんばってたら、死んでいた可能性があります。今にして思うと、出血の原因は1週間前のことでした。急ぎの用事のためにキックボードで移動中、地面を蹴った瞬間、患部がプツンといった気がしました。おそらく、くっつきかかっていた患部が開いてしまったのでしょう。わたしの無謀さであるにもかかわらず、Yさんはすべてを自分の責任として処理してくださいました。

入院して3日目、ICUから一般病棟に移りました。ICUでONにしていた機内モードをOFFにした瞬間、大量のメールがなだれ込んできました。ほとんどはどこかで事態を知って心配のメールでした。「生きていてくれてよかった」「まだ死なれたら困る」「まだまだ聞きたい話がある」、とてもうれしいメールでした。それから1週間ほどしたある日、Facebookを見ていると、いつも辛辣なコメントをされる友だちが「いつきは生きているだけで意味がある」という投稿をしてくださっていました。その時「単なるいつきにも価値があったんだ」と思いました。

大量出血のできごとを通して、自分はたくさんの人に支えられてきたことがわかったとともに、だからこそ等身大の自分でいいと思えるようになりました。